

論 文 要 旨

氏 名 _____ 錢 雅純 _____

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

_____ 意思決定における道徳判断の文化普遍性と文化差についての検討 _____

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

論文要旨

近年、新型コロナウイルス (COVID-19) パンデミックに伴い、倫理的ジレンマが深刻な問題として注目されるようになった。例えば、強制ワクチンによって生じる集団免疫を確保する必要性と個人の意志を尊重する権利との間に生じる緊張や、医療資源の限られた状況下で誰を優先的に集中治療室に入院させるべきかという難しい問題などである (Caron, Blanc & Brigaud, 2022; Shortland, McGarry & Merizalde, 2020)。新型コロナウイルスのパンデミックは世界的な課題であり、それに伴う道徳的ジレンマも世界各地で発生している可能性がある。道徳的ジレンマに直面した際の道徳的判断は、異なる文化的背景や価値観を持つ人々が、同じ道徳的ジレンマに直面した際にもどのような道徳的判断を行うのかを理解することは重要だと思われる。道徳的判断とは、ある行動が正しいまたは間違っているとする判断のことである。道徳的判断に関する実験倫理学 (Experimental Ethics)において、文化による道徳的判断の違いの解明—道徳的判断の文化的普遍性と文化差についての研究が盛んに行われている (Michelin et al., 2010)。Kohlberg は、道徳判断の内容には文化によって偏りがあることを認めるが、形式には文化を越えた普遍性があると主張する。彼によれば、道徳的判断の形式は、いかなる文化においても同じように一定の順序を通して発達する (Kohlberg, 1976)。そして、ほとんどの文化は、他者を傷つけないこと、公正と正義、正直と信頼性など、いくつかの共通の道徳的原則を有しており、道徳とは何かについて、ある程度一致し

ていることが指摘されている (Gibbs, et al., 2007)。西欧文化が哲学と倫理学の長い伝統を持っているため、これまで、道徳的判断の研究において使用される理論モデルは主に、西洋文化を起源としている。たとえば、理性的な道徳的判断モデル、社会的直観者モデル (Social intuitionist model)、二重過程モデル (Dual process model)、CNI モデル (Consequences, norms, and generalized inaction model) などである。それらの西欧において有効とされているモデルが、非西欧圏における有効性については検討する必要がある。そこで、道徳的判断の文化的普遍性の検証として、本研究の第一の目的は、西欧のモデルが東洋文化 (日本と中国) に対して適用可能かどうかを検討することである。

西欧社会とアジア社会は多くの点で大きく異なるため、異文化研究は、通常、西欧人 (ヨーロッパ, アメリカなど) とアジア人 (中国, 日本, 韓国など) を対象とした比較を行っている。道徳的判断の国際比較において、西欧とアジアの比較研究が多くなされている。それらの研究は集団主義と個人主義という観点から、文化の違いを大まかに西洋と東洋の違いとして捉えているが、文化における他の要素については十分な検討が行われていない。同時に、文化の差が小さく、類似性の高い地域に焦点を当てた研究は少ない。文化的環境の差異が小さいほど、個人の道徳的判断にどのように影響を与えるかどうかは不明である。日本文化と中国文化は同じ東アジア文化圏に属しているが、その文化的特徴にはいくつかの違いがある。例えば、中国文化は中国の伝統的な思想や文化

の基調に大きな断絶がなく、土着のままであるのに対し、日本文化は比較的多様で、文化の融合や混血が見られる (林, 2021)。近代以降、多くの東アジア研究者が東アジアの文化や価値観の違いに注目し、一定の成果を上げてきたが、東アジア文化に対する理解や知識はまだ不十分である (Kim, Shoemin & Choi, 2013)。したがって、東アジアにおける道徳的判断の異文化研究は、東アジアの価値観に対する世界の発見を促し、東アジア文化圏のコミュニケーションと理解を高めるのに役立つと考えられる。そこで、本研究の第二の目的は、東アジア文化圏に属する日本人と中国人を対象として、文化背景の違いが個人の道徳的判断に及ぼす影響を明らかにすることである。

また、人間の脳と心は過去の経験によって形成され、それは主に、人々が生活する一定の文化的背景を持つ環境からもたらされる。近年、神経科学者は文化的に関連した認知過程の神経メカニズムに注目し始めている。文化的神経科学は、文化心理学と神経生理学的測定法 (機能的磁気共鳴脳画像法など) を組み合わせたもので、文化的背景がさまざまな認知・情動プロセスに関連する脳活動に影響を与えることを主張している (Gutchess & Rajaram, 2023)。東洋文化と西洋文化では、視覚、注意、自己認識などの活動において異なる脳の反応を示している (Zhu et al., 2007; Cheon et al., 2011)。それらの発見は文化・教育心理学が提唱する文化的背景、教育、脳の発達の相互作用の視点を支持するものである。しかし、東洋文化の日本人と中国人が道徳的判断を行う際にどのような脳活動の違いがあるのかについては、まだ解明されていない。そこで、本研究の

第三の目的は日本人と中国人を対象として、文化背景の違いが道徳的判断に関連する脳部位の活動に影響を及ぼすかどうかを明らかにしようとするものである。

本論文の第1章では、道徳的判断に関連する理論モデルを概観し、道徳的判断の文化的普遍性と文化差について論じて、問題点を指摘した。

第2章(研究I)では、日本人345名を対象として、Greeneらの二重過程モデルの日本語版の質問紙を実施した。二重過程モデルによれば、モラルパーソナルジレンマにおいて義務論的判断に結びついた直観的で情動的な反応と、功利主義的判断に結びついたより制御された認知的反応は、どちらも重要な役割を担っている。その結果、西欧において有効とされているGreeneらの二重過程モデルは、非西欧(日本)においても有効であることを示した。また、婚姻状況、子どもの有無、年収、就労状況などの社会的人口属性が、二重過程モデルのモラルパーソナルジレンマにおける日本人の道徳的判断に影響を及ぼすことが示唆された。

第3章(研究II)では、日本人211名と中国人200名を対象として、CNIモデルの道徳ジレンマ課題を行った。その後、日本人、中国人、アメリカ人(元のデータ)の三つの国の比較を行った。CNIモデルとは、最近西欧の研究者が提案した「結果、規範、一般化された不作為」という多項式モデルである。その結果、CNIモデルが日本人と中国人に対して適用可能であることを示した。それは道徳的判断の普遍性論を支持し、人々が道徳的判断を行うプロセスが文化などの要因の影響を受けながらも、ほぼ一貫してい

ることを示している。また、東アジアの女性とアメリカの女性は、それぞれの国の男性よりも道徳的規範に有意に敏感であった。それは女性の道徳的敏感性と共感性が男性よりも高いことに関連すると考えられる (Harenski et al., 2008)。国際比較では、アメリカ人は日本人と中国人に比べて、最も道徳的規範に敏感であった。それは彼らが個人のニーズ、責任、および属性を強調する独立した自己構築の見通しを持っているという事実に関連しているかもしれない (Rothbaum et al., 2000)。日本人は、男性と女性の両方で、不作為の傾向が最も高かった。日本人が自分の考えを表現するのが苦手であり保守な傾向があり (Petkova, 2015)、日本人に根付いている「自分の意見を表明すれば周囲の反対に遭うかもしれない」という信念 (Maftoon & Ziafar, 2013) のためであると考えられる。

第4章 (研究III) では、日本人25名と中国人29名を対象として機能的近赤外線スペクトロスコピー (functional Near Infrared Spectroscopy: fNIRS) を用いてCNIモデル課題遂行中の前頭前野 (PFC) の脳活動を検討した。その結果、日本人と中国人のPFCの脳活動に有意差があることが明らかになった。具体的には、中国人男性は中国人女性よりも右側背外側前頭前野 (Right- Dorsolateral prefrontal cortex: R-DLPFC) の活動が高かったのに対し、日本人女性は日本人男性よりも左側背外側前頭前野 (Left- Dorsolateral prefrontal cortex: L-DLPFC) の活動が高かった。国際比較では、R-DLPFCの活動については日本人男性より中国人男性のほうが高く、左側腹外側前頭前野 (Left- Ventrolateral prefrontal cortex: L-VLPFC) の活動は中国人男性より日本人男性で高く、右側腹内側前頭

前野 (Right- Ventromedial prefrontal cortex: R-VMPFC) の活動は中国人女性よりも日本人女性で高かった。これらの結果は, CNI モデル課題遂行中, 文化差と性差の違いにより, 日本人と中国人の PFC の脳活動が異なる可能性を示唆するものである。第 5 章では, 総合考察として, 研究 I から研究 III によって得られた知見を概括し, 道徳的判断の文化的普遍性, 日本人と中国人の道徳的判断の文化差異および日本人と中国人の脳活動変化の差異についてまとめて総合考察を行った。

これまで, 道徳的判断を研究するための方法や理論モデルは, 主に西欧の研究者によって提案され, 発展してきた。これは, 西欧文化が哲学と倫理学の長い伝統を持っていることと関係していると考えられる。具体的に, 西欧における道徳の研究は, ソクラテス, プラトン, アリストテレスといった古代ギリシャの哲学者にまで遡ることができる。これらの哲学者たちは, 徳, 倫理, 道徳規範に関する理論を提唱し, その思想は後の西欧哲学や道徳学に多大な影響を与え, 道徳研究の確固たる基礎を築いた。また, 西欧文化の道徳概念はキリスト教の影響を強く受けている。キリスト教の教えは, 慈愛, 博愛, 公正, 正義といった道徳原理を強調している。これらの原則は西欧文化に深く根ざしており, 西欧社会の道徳概念の確固たる基盤となっている。西欧倫理学はまた, 啓蒙主義, 実存主義, ポストモダニズムなど, いくつもの時代を経て発展してきた。これらの時代には多くの倫理学者や哲学者が輩出され, 倫理学の分野で様々な理論や視点を提唱し, 西欧文化における道徳の議論に新たなアイデアや視点を注入してきた。そのようにして

発展してきた西欧哲学の伝統は大学や研究機関において維持されてきた。多くの哲学科や倫理学研究センターが、倫理学研究を推進している。

グローバル化が進み、異文化研究が一般的になるにつれ、東洋文化の貢献が徐々に注目されるようになってきた。現代の研究では、道徳的判断をより深く理解するために、異なる文化の観点を考慮するようになってきている。CNIモデルのジレンマ・トピックには、ナチス時代に関するものなど、東洋人にはあまりなじみのない文化的背景や言葉が含まれていたため、それらによる過剰な影響が懸念される。道徳的判断に関する研究は常に西欧のモデルに基づいて、他の文化における適応性を検証してきたが、もしその逆であれば、東洋文化の背景を持つモデルが西欧の集団に適応できるかどうかを検証され、道徳的判断の普遍性のより良い検証になりうるかもしれないと考えられる。東洋文化、特に伝統的な東洋哲学体系は、智慧や禅思想など、他の側面に重点を置いているかもしれない。今後の研究が、東洋文化における道徳的判断のモデルを発展させ、世界的な道徳的判断の研究に貢献することが期待される。